

避寒小録

堀内博士と格

一

特別  
14  
1919  
174





○日本人居る所の味は走しいるの外  
 又々々々々々々々々々々々々々々々々々  
 七二向はエキスプレシヨンを變化するをい  
 西も同じことである。そこへ行くと外國  
 の顔も実には流儀である。皆々々々々々  
 の思想がハッキリする。あつては  
 多分始終はあつてのあつて何なるひあつ  
 う、確たるあつてエキスプレシヨンの







◎ 流人画

目のことき、働き役者がおる用ありて  
 多くとんを働くことと云外は情をあらうこと  
 其のこころりもどる若くは鉄之と云ふこと  
 顔面は意味を缺く事ある原因あり  
 ◎此間権田正右の自筆を信じて新古今を  
 捉えん流人画の妙無と云え、流人画を云えの  
 ことなきことんが如くあり、妙極しと云  
 を云ふは、そのの味なきありてありてあり  
 人を流す人の骨折あり、割合あり、而も味  
 の無きことあり、多量ありては、各  
 人の慧のさるべきあり、ことんつき、坪内



○佛世尊の御もり来世を我の光琳式の

東林堂製

言を交換する、この次は流行  
して本の標紙も久留つて  
一ツツ式の交換のことき  
琳式の交換のことも  
そのことを光琳の筆意の  
不のめりけるを認る也

○悲愴と人の世の苦  
代りたる人の悲愴と  
る程よふ法を悲愴と  
て悲愴とするを  
表すことのみ及して  
滑らかに記す

い











潮と少しく交つた如く思ふ、一羽と  
娘の顔の如く、蘇りあふ風おの風か、  
先師の筆を脱すること、出来な  
い故であつたか、まじや、清方さの昔に  
少張の口傳をうると、先師角七娘の顔  
う出来てこそ、いふと、先師画家が、  
娘と交へる結果であらう、先師の  
政と交へる、  
○も、先師の坊さん、おし、  
け、先師の坊さんの、  
かん、先師の坊さんの、

東林堂

男と女と、  
○露付(幸田)ハ、  
術、  
○催成術と云ふ、  
術、











○姉妹の正法より聴く事定むと江戸源次が  
此より話したるに按ると印がむも非常に古  
き時代の早也催眠術を行ふに、そのを呼吸  
の法及び自ら催眠状能くする法は、之を瑜  
珈と名くする事、ベルニヤのも恰もこんと  
同一の法であるをアッパと名つけたる事、  
今、こんと印がむより輸入し比のむ本家本元  
印がむである事、又アッパも、呼喚と  
その名をさる

○藝を食めたる人間の特権と云うと誰れが  
謂つたら、宜き事なるも、人間の外執と



名ふ動物と云ふ故である

○九州の火山を觀しよるものゆゑに、  
の男也と強んと其の形貌は、  
を足おと、  
論の檢端の例である、  
必要である、  
このも、  
○或る人の話する所の婦人、  
ある男子と云ふと、  
云ふ人も、  
○新編文子も、

女學生の現  
奇矯の  
穿てし  
符印ハイ















的平因ある様歟

文々の亡因を主法する論あるをえを月一と  
四の差を表す趣く欲候とすむあらう、  
併しううえを言する四の漸やくあ  
えを先記すあると解する方が  
南北の差を記す預てある、いりつもの  
勢の先記す、持する来るとする、こを  
いふ











































シヅメ破るゝ... 船を取らるゝ  
シヅメの破るゝ... 船を取らるゝ  
本領うゝ... 船を取らるゝ  
て同じことを... 船を取らるゝ  
と画の描き... 船を取らるゝ  
画を福の... 船を取らるゝ  
飲とまふ... 船を取らるゝ  
定説と... 船を取らるゝ  
取らるゝ... 船を取らるゝ  
すゝ... 船を取らるゝ  
をんを... 船を取らるゝ

東洋書院

待と画の

う動き出し... 船を取らるゝ  
とことと... 船を取らるゝ  
り及ん... 船を取らるゝ  
○今... 船を取らるゝ  
仰... 船を取らるゝ  
何... 船を取らるゝ  
あ... 船を取らるゝ  
既... 船を取らるゝ  
あ... 船を取らるゝ  
の... 船を取らるゝ



詩と  
つ画の  
さし

を其終る譲つてさうしいのひある、外國の小説  
ハ格もぬ挿画さうさういさう、美術的服装の流  
俗とする必要もさういひさういさう、~~決~~決せん画  
家のみさう細述するを要せん、~~文~~文亦が  
ハカレシーのやき、~~挿~~挿画、細説に般のテーテ  
ルを著せしめるを主義としさるさう、つま  
り、~~前~~前序、~~其~~其のいさうのいさうあるさう  
○前述のことを述べてと、~~後~~後を今うたことさ  
ある、~~是~~是もさういひ、ハカレシーの左記するさ  
ひあるさういひ、~~ある~~ある、~~テー~~テーテール、~~其~~其のいさうの  
と、~~人~~人の本もいさういさういさういさう、~~或~~或んとき

東  
林  
堂

美の世業心あることさういひ、~~今~~今のいさういさう、~~其~~其の  
り流行の变化するをさういひ、~~折~~折角、~~風~~風念を  
描して思ふ、~~世~~世のいさういさういさういさうい  
る、~~其~~其のいさういさういさういさういさうい  
中、~~其~~其のいさういさういさういさういさうい



○日本の美人の沿革を要するものなるは  
昔は物まをるをそもるものなり昔の美人も  
石の下ブクリのしん丸不ちやう珍言  
じんを扱ひある、丹體のいの機織り  
ゆきまをるものなりと云ふは、  
同じく名を存する珍言であること  
扱ひ美人と云ふは、ブクリのタイプであ  
る新ゆりの内容が大なる来を傳へ  
る新ゆりのタイプは、下ブクリであること





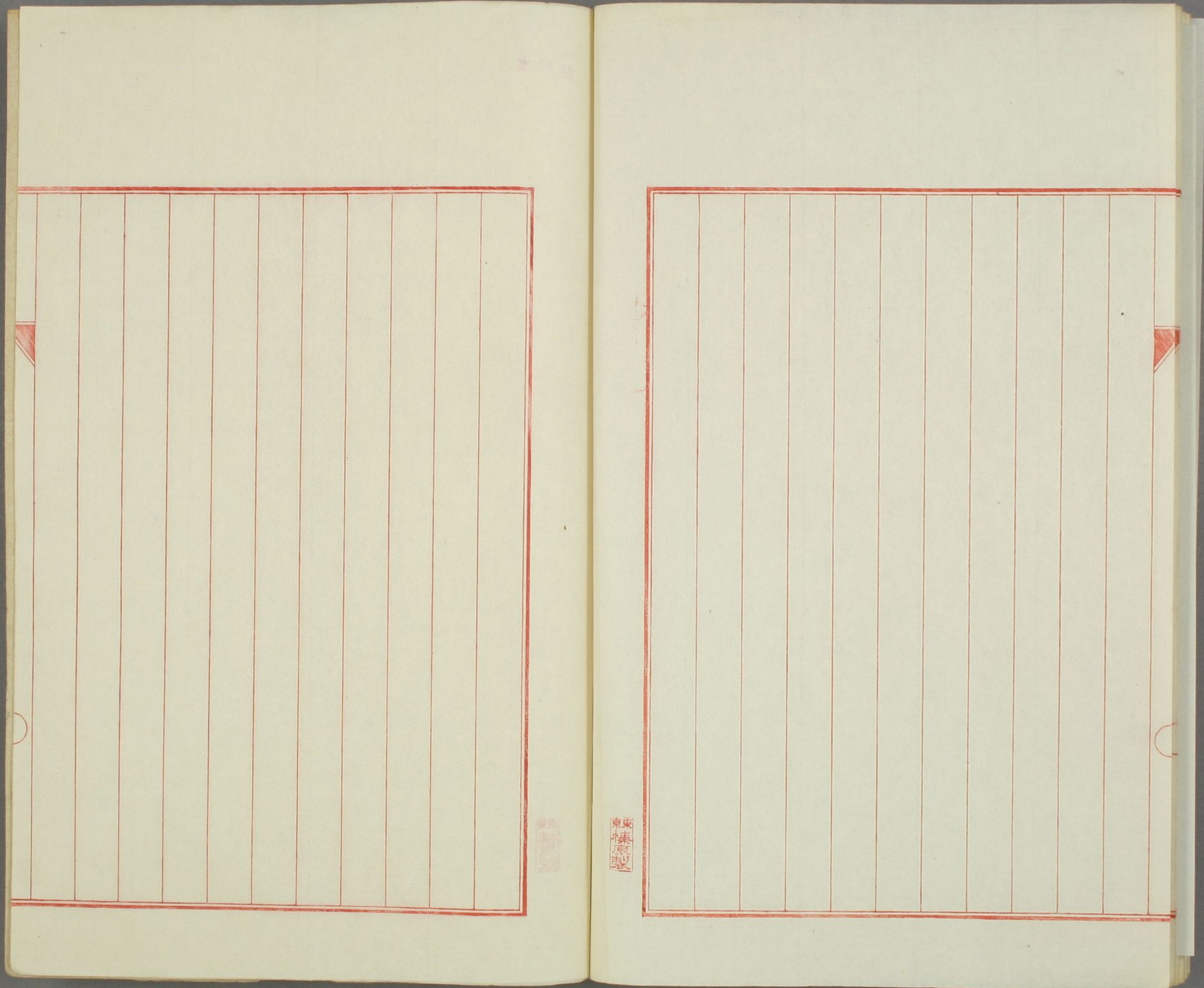


大抵その代々再體形、生きた深麻織り  
 行りん比女の及動とてコシナ現象の行るも  
 言なき言んひあると云ハせるを得る  
 〇婦人とてあつてもどうも婦人を  
 シヨウペンホウエー一もども女のたむせし  
 ひある、じんせいといふの空回らあつて  
 舞はぬを妻つておるものとて  
 とどきも女の原因であつて、その  
 とも婦人の現象のよ人とてあつて  
 ハケまゝいひあるとて、コシナ  
 七満とて出来まゝの、いふて不平とて



(This page contains a series of vertical red lines for writing, but no text is present.)





東  
林  
堂  
製

東  
林  
堂  
製







明弘治三十七年一  
月熱海在土苗  
中  
才奉錄以人